

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00273

研究課題名（和文）近代ドイツにおけるダウジングの流行

研究課題名（英文）The Dowsing Craze in Modern Germany

研究代表者

浜野 志保（Hamano, Shiho）

千葉工業大学・創造工学部・教授

研究者番号：90550666

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀末から20世紀前半にかけてドイツで流行したダウジングについて、当時のダウジング研究組織の機関誌を中心に一次資料の調査を実施した。古くから行われていたダウジングが19世紀末に注目を集めたきっかけは、都市部の水不足という現実的な問題であったが、予防医学への意識の高まりや、ナチス・ドイツによる先史遺産研究などと結びつき、その目的が多様化していく。今回の研究を通じて、ある時代・地域における社会の状況を背景として、境界科学（Grenzwissenschaft / border science）がどのように支持を集め、どのように変質していくかという一事例の全貌を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ある時代・地域における社会の状況を背景として、境界科学（Grenzwissenschaft / border science）がどのように支持を集め、どのように変質していくかという一事例の全貌を明らかにした。文化史的な観点からの境界科学の研究は、文化史においても科学史においても取り組んでいる研究者が少ないテーマであり、その点において本研究は先駆的であると考えられる。また、境界科学の事例は現代社会においても多数存在し、その中には陰謀論などと結びついて社会を不安に陥れるものも少なくないので、その実態を解明することには十分な社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We conducted a survey of primary source on dowsing, which was popular in Germany from the end of the 19th century to the first half of the 20th century, focusing on the journals of dowsing research organizations of the time. Dowsing, which had been practiced since ancient times, attracted attention at the end of the 19th century because of the practical problem of water shortages in urban areas, but its purpose diversified as it became linked to growing awareness of preventive medicine and research on prehistoric heritage by Nazi Germany. Through this research, we have been able to reveal the whole picture of a case study of how border science (Grenzwissenschaft) gained support and was transformed against the backdrop of the social conditions of a certain period and region

研究分野：文化史

キーワード：境界科学 文化史 近代ドイツ ダウジング

1. 研究開始当初の背景

ドイツにおけるダウジングの流行については、比較的長期にわたる流行であったにも関わらず、歴史研究の領域ではほとんど注目されてこなかった。現時点においては、コリンナ・トライテル『魂のための科学』(2004)において言及されているのが、国内外を通じてほぼ唯一の先行研究である¹。単なる疑似科学の一事例として看過されてきたためだろう。しかしながら、実際に有効であるかどうかはさておき、ダウジングの流行という現象自体は、同時代のドイツの科学史や医学史、社会史などと密接な関わりを持っている。

研究代表者は、2010～2012年度に若手研究(B)「写真と疑似科学」(課題番号 22720064)の助成を受け、19世紀後半から20世紀初頭にかけて大量に撮影されたパラノーマル写真(心霊写真、念写など)の事例研究をおこなった。この研究では、パラノーマル写真に関する一次資料をイギリスおよびドイツでの調査によって収集した後、視覚文化史および疑似科学史と照らし合わせ、網羅的かつ体系的なパラノーマル写真の発展史の構築を試み、その成果を単著『写真のボーダーランド』として発表した²。この研究において取り上げた研究対象の一つが、ドイツの心霊研究者フリードリヒ・カレンベルク(Friedrich Kallenberg)による「写真ダウジング」の試みである³。これは、写真から放出される不可視のエネルギーを振り子式のダウジングにより検知しようとしたものであるが、これについて調査を進める内に、ダウジング自体が19世紀後半からドイツにおいて流行し、実践や研究をおこなう組織が複数存在していたことが明らかになった。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀後半から戦間期にかけてのドイツにおけるダウジングについて、その全貌および歴史的な背景を明らかにすることを目的としていた。

「ダウジング」とは、ロッド(棒 Wünschelrute)またはペンデュラム(振り子 siderisch Pendel)の動きによって、水源や鉱脈、放射線、エネルギー、遺失物などといった対象を感知する技法のことである。ロッドを用いるダウジングでは、立ち止まっている間は先端が安定したポジションで静止し、感知を行なっている間は反応に応じて先端が動く程度の力加減で両手にロッドを握り、ゆっくりと歩きながら感知を行う。ロッドの材質や形状は様々ではなく、二本のロッドを両手にそれぞれ持って用いるものもあれば、一本のロッドの両端を握って用いるものもある。他方、ペンデュラムを用いるダウジングでは、先端に振り子がついた紐や鎖を垂らして感知を行う。紐や鎖は手で持つことが多いが、筋肉の動きなどの影響を減らすため、専用の台座などに取り付けられた器具を用いるケースもある。ロッドとペンデュラムのいずれの場合も、感知を行う者の意思とは関係なく、器具の先端が自由に動く状態になっていることが肝要とされる。

ダウジングは19世紀後半のドイツにおいて、工業化に伴う都市部の水不足解消のための水脈探知法として注目された。だが、1930年前後から、ダウジングの主目的は、本来の水脈探知から、病気予防のための放射線/エネルギー探知へと変容していった。疑似科学の一事例であるダウジングは、数多くの実践例があるにも関わらず、これまでの科学史および文化史研究においてほぼ看過されてきた。本研究は、歴史的事象としてのダウジングについての先駆的な研究であると同時に、ある時代や地域における科学や社会の変化が、その副産物としての疑似科学の流行を生み出す一般的な過程を明らかにすることで、今後の社会や科学技術の変化に伴ってどのような疑似科学の流行が発生するかの予測等に役立てることを目指した。

3. 研究の方法

ダウジングの手引書として人気を博したクリンコウシュトローム&マルトツァーン『占杖便覧』(1931)⁴をはじめとする当時の文献の他、1870年代から80年代にかけてダウジング関連の記事を多く掲載していた *Psychische Studien*, *Sphinx*, *Schorers Familienblatt*, *Die Zukunft* や、1900年代に入ってから関連記事を掲載していた *Prometheus*, *Berliner Tageblatt*, *Die Woche* などの定期刊行物や、当時の中心的なダウジング組織である「ダウジング問題解明連盟(Verband zur Klärung der Wünschelrutenfrage:VKW)」および「国際ダウジング協会(Internationalen Vereins der Wünschelrute:IVW)」の会報や会合の記録、放射線ダウジングについて書かれた戦

¹ Treitel, Corinna. *A Science for the Soul: Occultism and the Genesis of the German Modern*. (Johns Hopkins University Press, 2004)

² 浜野志保『写真のボーダーランド - X線・心霊写真・念写』(青弓社、2015)

³ Kallenberg, Friedrich. *Offenbarungen des siderischen Pendels. Die Lebensausströmende Photographie und Handschrift*. (J.C. Huber, 1913)

⁴ Von Klinckowstroem, Carl, und Rudolf Maltzahn, *Handbuch der Wünschelrute: Geschichte, Wissenschaft, Anwendung*. (De Gruyter Oldenbourg, 1931)

間期の文献など、一次文献の調査を中心に行った。「ダウジング問題解明連盟」は、開業医のエドゥアルト・アイグナー博士、区裁判所判事のフリードリヒ・ベーム博士、元・海軍港湾建設局長で海軍正枢密顧問官のゲオルグ・フランツィウス、大学教授ロベルト・バイラオホ工学博士、技術史・科学史家のカール・フォン・クリンコウシュトレーム伯爵や、ハルバーシュタットのガス水道局長のアルベルト・ツィンクラによって設立され、1912年から機関誌『ダウジングロット (*Die Wünschelrute*)』を刊行していた。他方の「国際ダウジング協会」は1913年に設立された後発の団体ではあるが、着実に会員数を伸ばしており、1921年頃からはいくつかの地方支部も結成されている。1920年7月から刊行が開始された機関誌『ダウジング研究ジャーナル (*Zeitschrift der Wünschelrutenforschung*)』は、月間・隔月刊・季刊と発行頻度を変化させつつも、戦争の影響を受けて休刊となる1941年までの20年にわたり継続して刊行された。この機関誌の読者には、IVWの会員のみならず、ダウジングに関心があったり、何らかの形でダウジングを利用したいと考えたりしている非会員も含まれていた。各号の裏表紙には、依頼によってダウジングを実施することができる会員の名簿が掲載されていた。これら二つの団体は各々に独立した組織ではあったが、VKWの機関誌が財政難により休刊に追い込まれそうになった際には、『ダウジング研究ジャーナル』が同誌を吸収合併する形で継続が決まっている。それ以後の『ダウジング研究ジャーナル』には、クリンコウシュトレームやマルトツアーンといったVKWの中心メンバーたちも寄稿している。

作業の効率化および経費の合理化のため、アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク心理学精神衛生境界領域研究所 (*Das Institut für Grenzgebiete der Psychologie und Psychohygiene, Albert-Ludwigs-Universität Freiburg*)、英国心靈現象研究協会 (*The Society for Psychical Research*) などのデータベースを活用し、可能な限りデジタル版での一次資料入手を試みた。デジタル版またはリプリント版などでの入手が不可能な資料については、ベルリン州立図書館およびドイツ国立図書館での資料調査を行った。

尚、本研究は19世紀後半から戦間期にかけてのドイツにおけるダウジングの実践および理論を研究対象とし、その流行の全容を明らかにすると同時に、科学的・社会的な背景を明らかにすることを目的としていた。ダウジングについては、同時代のドイツ以外の地域や、19世紀前半以前あるいは20世紀後半以後のドイツにおいても実践例があるが、流行といえるほどの広がりは見られないため、本研究では比較の対象として参照するにとどめた。

また、本研究はダウジングという具体的な事例を通じて、ある時代・地域における疑似科学の流行がどのような状況で発生し、同時代・同地域の科学や社会からどのような影響を受けるのかについても検証するものであった。同時代のドイツでは、筆跡学 (*Graphologie*) や骨相学 (*Phrenologie*) など、ダウジング以外にも複数の疑似科学が流行していた。これらのダウジング以外の疑似科学の事例については、疑似科学一般と時代・地域との関連を理解する上で参考になることが予測されたので、必要に応じて参照した。

4. 研究成果

本研究を開始した当初、ダウジングに関わる同時代の事象として想定していたのは、ヒトラー政権下において広まった予防医学の発想だった。身体に影響を与える不可視の放射線をダウジングによって検知しようとする試みは、同時代における放射線医学の発展と密接に関わっていることについては、先述の拙著『写真のボーダーランド』においても指摘した。特に着目していたのは、グスタフ・フライヘア・フォン・ポールが1932年の著書『病気およびガンの誘因としての地球線』で唱えた「地球線 (*Erdstrahlen*)」説のインパクトである⁵。

本研究では、この点についてさらに詳しく解明する予定であったが、現地でおこなった資料調査を通じ、ドイツ先史研究との結びつきについても明らかになった。ドイツ先史研究におけるダウジングの関与については、ミヒャエル・カーターによる先行研究⁶などにおいても言及されているが、本研究では特に、アーネンエルベのメンバーでもあった先史研究家ヴィルヘルム・トイト (*Wilhelm Teudt, 1860-1942*) の果たした役割や、同時代にイギリスで誕生したレイライン理論との関係を明らかにした。

研究成果の発表については、当初の予定では、2020年に日本科学史学会および国際文化史学会にて研究発表を行い、2020年から2021年にかけて両学会の論文誌に論文を投稿することを目指していた。しかしながら、2021年に日本科学史学会年會にて研究発表「戦間期ドイツにおけるダウジングの実践」をおこなったものの、論文としてまとめる作業が大幅に遅れ、2022年度までの論文掲載には至らなかった。現在、2023年度内の掲載を目指して論文投稿の準備を進めるとともに、本研究成果をまとめた単著の刊行を準備中である。

⁵ Freiherr von Pohl, Gustav. *Erdstrahlen als Krankheits- und Krebserreger*. (Jos.C. Huber, 1932)

⁶ Kater, Michael H. *Das "Ahnenerbe" der SS 1935-1945: Ein Beitrag zur Kulturpolitik des Dritten Reiches*. (De Gruyter Oldenbourg, 2006) [ミヒャエル・H・カーター著、森貴史監訳『SS先史遺産研究所アーネンエルベ ナチスのアーリア帝国構想と狂気の学術』(ヒカルランド、2020年)]

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浜野志保
2. 発表標題 戦間期ドイツにおけるダウジングの実践
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------